畫圖西遊譚
貳

西遊旅譚巻之二

八月七日鳥羽(トバ)を発(ハツ)して舟にて島々の中を渡(ワタル)風景(フウケイ)佳(カ)なり
飛島を右に見て左に朝熊(アサマ)山を望む是(コレ)より二里二見
の浦を左の方に見又それより一里ゆきて三軒家(サンゲンヤ)と云に
舟を着(ツケ)る〔此所酒食アリ〕五六町ばかり行川崎より又行事一里則宮河
なり畑山田川崎の浦々の濱より茅屋(カヤヤ)多し
松かくし瓦屋(カハラヤ)なり
八月九日江州土山の驛(エキ)をはなれより右京入山中小川を越る
事十二瀬又行て大河二瀬を渡(ワタリ)山中より入山の頂(ウヘ)を行加井掛(カヰカケ)

ところ此辺人家行つゞきけれバそれよりハ平地にして田畑のはるかなる処を行(ユキ)
日野に至るに数日ずある人家二千餘軒四面山ありて
海をとほく見ん加藤侯の領地なり
八月十二日日野より一里餘山路に入小野村といへる墓(ハカタ)の山ー

山田の町家作り

林にして田夫(デンプ ヒヤクセウ)の茅舎(ボウシヤ カヤヤ)をところ二軒
行厨(ベンタウ)を開きけれバ童子二三輩(ハイ)
かたはらに来る餅糖(クハシ)など与へ(アタヘ)けれバ
出しけれバ二而菜(サイ)の児(コ)ハ不應(アヤシミテズ)して
傍(カタハラ)まで来る五六歳(サイ)の童(ワラベ)ハ畏(オソレ)て

小野村山中の小童
皂角子(サイカチ)の木多し
土俗曰
むかし人魚
の血落たる
所に生じたる
木と云
人魚墳
八方より
文字
あれども
不見
土民の曰救世(グゼ)菩薩の
墳と云小童今もなげ
うてば鐘の音をいだすと
ハカ
三尺
一尺寸余

逃去（ニゲノサリ）ぬ　山林の童（コドモ）ハ總（スベ）て都の人の美眼をしらず 恐（キ）れ帯刀（タイタウ）せる人を見ざる所謂なり　此一村四十余軒あり又四五町許（ハカリ）山径（サンケイ ヤマミチ）に入路傍（ロホウ ミチノカタハラ）に四隅（カク）の墳（ツカ）あり救世（グセ）菩薩（ボサツ）の墳（ツカ）といふ又人魚を殺（コロシ）ける所といふ　蒲生川より人魚をとられし 聖徳太子崩御の時なり

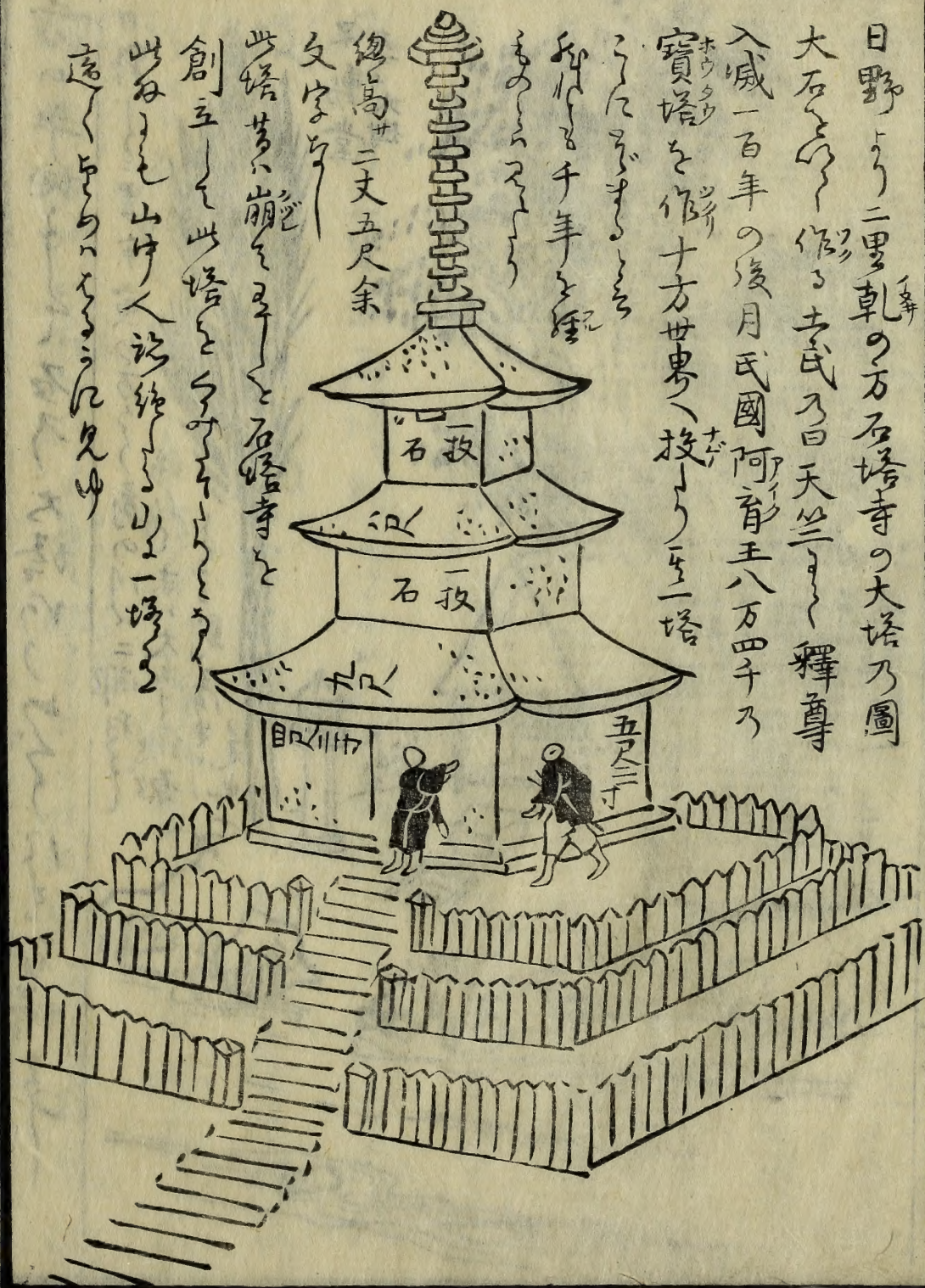
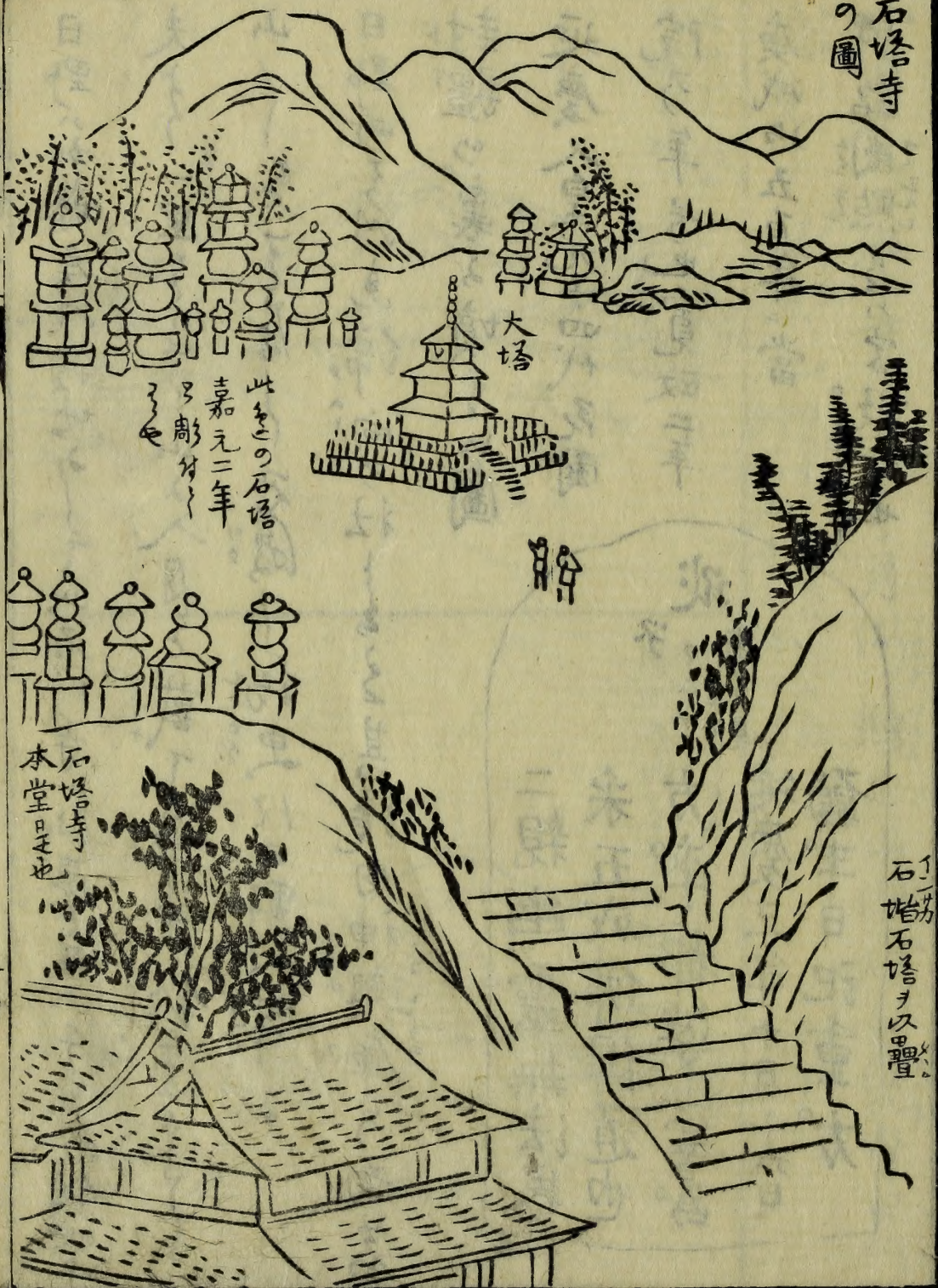
夫より西の方不動堂といふ堂ありけるに八方の墳あり是も人魚（ニンギヨ）墳なり日本紀に推古帝（スイコテイ）二十七代四月留とあり又行事二里余石塔村といふ村内石垣に出飛（トビ）石又ハ流に塔田（タウデン）のなかにあり家の隅なる所踏處（フムトコロ）九輪（リン）丸石屋根形（ナリ）の累（ルイ）々たる石塔の丘（タロ）より夥しく石塔寺なる石坂（ザカ）あり石壇（ダン）悉（コトゴト）く石塔の古（フルキ）もの畳（タヽム）登（ノボル）事二十間余（ヨ）にして上百歩（ホ）四

方の平地にして石の大塔有りめぐりにも石塔多し

日野より二里余寅の方より前の川ハ二間程にして流れしまハ大なる川原となる則角生川是也

日野より二里乾の方石塔寺の大塔乃圖
大石をもて作る古記乃曰天竺にて釋尊
入滅一百年の後月氏國阿育王八万四千乃
寶塔を作り十方世界へ投うち玉ふ一塔
こゝにとゞまるといふ
所謂千年を経たる
ものなるべし
總高サ二丈五尺余
文字なし
此塔昔ハ崩れてありしを石塔寺を
創立して此塔をつみなほしたるとかや
此辺りも山中人跡絶たる山にて一塔のみ
遠くよりハなかなか見ゆ
一枚石
四尺
一枚石
六尺
五尺三寸

石塔寺の圖
大塔
此處の石塔
嘉元二年
ト彫付く
石塔寺本堂是也
石階石塔ヲ以疊メリ

日野ハ加藤侯の領地にして此石塔寺ハ仙臺侯八千石の領地之夫より一里ほと行て山に入月を戴て草中鈴虫すゞしく山々をすぎはし又渡し初更に日野へ帰る

日野町より川を越綿向の社とある甚境内神輿庫乃南なる封疆の裏に墳ある圖

延慶人皇九十四代花園院乃年号也寛政二年庚戌迄五百年に當

碑銘圏點あるハ字疑者也

跳 子
秀 ママ字在トモ不見

二親幽靈無法界
釆五戒佛得道也
方平都婆志心者爲
延慶三年十月十六日
願主日記重方

八月十五日石山寺に宿る月漸照て山湖水を繞勢田の橋見ゆ佳景也

ウゴイト云魚ハ〳〵ト云魚鮒皆湖中ノ産ナリ

十七日大坂に着き数日滞(トドマル)高(コウ)津(ヅ)の祠より西北を望む大坂ハ九分見る此地の繁栄事繁(シゲ)多なれハこゝに略す

高津の祠より見る図

高閣ハ西東乃本願寺也

芝居川筋
木津川

天王寺石乃鳥居唐銅の額有り
小野道風の筆蹟といふ五重の塔
また聖徳太子堂多し
清水観音ハ高き所也眺ハ堺筋見え
皆畑也浮瀬といふ遊亭あり

大坂より船にて渡(ワタリ)兵庫まて十里摩耶山(マヤサン)下(カ)を走(ハシリ)て則兵庫(スナハチヒヤウゴ)に至る市街(シカイ)冨商(フセウ)多し清盛の築嶋楠正成の塚あり和田の岬(ミサキ)行平乃松あり晦日須(ス)磨寺(マテラ)をとをりて敦盛の石塔(セキタウ)を見(ミル)

仲哀天皇の陵路傍
にあり自是垂水山の上千
壷と云所に陵乃跡也
舞子ノ濱、松優て道中
第一の佳景也夫より明
石に人丸の祠乃門に
入石碑を建寛文四
年甲辰明石城主日向守
源信之し誌

九月朔加子川と云驛より左方に入尾上の鐘高砂の松を
昔乃松ハ枯て若松を植たり尾上乃鐘支那物と見えたり
模樣天人樂器を鑄たり

尾上の鐘乃圖

住吉の祠又山畑を越て石乃寶殿あり此邊大石皆山をなす
是則御影石を切出せし
曽根の松ハ天満の祠乃境内にある祠大社にして老松
實に千歳を經る大樹也
夫より豆崎の驛に出る

西遊旅譚二
石の寶殿
石
石
一段高し
四尺四方
山皆石
石
曽根の松
甚乃大松にして龍蛇のわだかまるがごとし
一方ハ枯たり

市の川より姫路乃天守見ゆる

市の川乃前より姫路の天守見ゆ爰より下れ手に[illegible]いかる川へ二里片島の驛より赤穂へ三里山より入 赤穂ハ往来に行けば南海辺也と 数日城下に留る城内大石内蔵の屋舗門より二巳乃尾を五日新濱しほ浜をも見物し二三岬の明神参詣社古大松海岸を繞波濤漲る島ハ連て風景よし一[illegible]邊より舟出し渡事三里坂越

江にある船つき市中人家(ジンカ)多し。八日赤穂を發(ハツ)し市街(マチ)をとほりて山路に入り三里ほど山林にして路狭(ミチセバシ)其所松茸(マツタケ)多し是を八木(ヤキ)山越といふ坂上に出る即往還(スナハチワウクハン)是よりは備前にして伊部(イン)村焼物多し備前焼是なるべし

かくと云ふ所右の方に入事半里両山競(キツコ)て高(タカヽ)き山巌(サンヨウ)石となりて穴(アナ)ある岩草木を生し空庫(アナグラ)のごとし此岩の下にある樵(キコリ)者に是を問(トヘ)ば墳なりしものなるし

例の所作ある歟知者なし此山乃彼方に二間三間又ハ五六間
方なる塚大石を以て疊てあるも多し總て備前備中
の國内古墳陵の類多し然とも往古の事にして傳記なし
此奥十餘町に寺ある觀音を安置せる飛泉を見大路より
西なり夫より四里ゆきて岡山なる城下市街續て富人多し
京橋より一二町を隔て二ツ架る橋あり數多留る
十一日岡山を發てゆく事二里備前備中の境なる所にあり
小一社は吉備津の祠に釜ある初穂銀を納れハ火を焼
其釜忽鳴動する事奇也備中の方にハ一とう奇事多し

祠も後世建るよし跡を去るの二里右乃方ニ入足守也木下侯二万五千石の領地也陣屋より黒宮氏の庭中に飛石ハ古礎を以てす径二尺余是ハ備中足守賀陽郡溝手村賀陽寺乃古跡より堀出せし千年を経たるもの也又径尺五六寸余生焼の壷あり同賀陽郡巌山下より堀出せし外ニ鬼面の瓦を見る肉高く作りて希に見ざる也領内柏井といふ所足守より一里田の中丈四方雪の不積所あり黒宮氏発起して湯治場となせり浴する者多し

色ハウス墨灰色なり

是より五六町ばかりにて中山に登りつめし所岩石数十丈聳えて飛泉あり又鬼城といへる石をもて城のめぐりに作る鬼乃釜口径八九尺あり因幡乃方へ十余里鐘乳穴あり穴中甚廣く鐘乳石多し

備中下道郡南山より西に古墳あり河邊の驛より十二三町南に入墳乃高さ七間半許登りて上丸く廣さ亘六間中壇廣一間半に周二百四十歩許溝ありて深さ六七尺埋りて遺封疆乃高さ六尺形勢櫃周四百歩余所々に壺を置その数千もありしが今ハ二十許残りけり

壺乃口径八寸高サ一尺二寸如圖半に帯あり素焼にして赤色なり

備中下道郡二万里(ニマンリ)塚(ツカ)の圖

塚の前後左右昔(ムカシ)の塘(ドテ)となりて今ハ田となる
大墳高(タカサ)八間(ケン)小墳高サ七間小墳大墳に傍(ソフ)て
穴あり土崩(クヅレ)て穴の口廣(ヒロ)さ六尺二三十年前
まで人這入(ハイリ)しと云伝ふすに穴の内平らにして
凡十四五歩ゆけハ石門ありて石の
扉(トビラ)あり是より奥ハ底(ソコ)の方より
穴ありて入りしと云上古の
王侯の墳なり

同山手村古墳より十五六間許(ハカリ)山を登(ノボリ)て穴より二間深さ也

入りて八間を四方天井(テンゼウ)石一枚よく置

左右も一枚石也穴中

高さまくの七八尺

是より國分寺へ

五町ばかり

九月十四日足守を發して長田村なる窪木村より宗坐といふ
所人家つゞきある冨商もあり夫より中原川を渡て岡田より
至る伊東侯の陣屋あり稲荷ありて矢掛に至る是還より板倉侯
領地人家続く此間吉備公の墳あり夫より神邊に至る今津此
所福山の城見ゆる阿部侯十万石の領地なり過れは尾の道
といふ所に到る市街縦横ありて冨商多し西の小江戸といふよし
藝州侯の領地なり此所より船に乗舟を出して東風にて走
事十八九里夜に入小島に泊る夜半東風吹て船を
出す明方小島に至る船中より西南の方を眺望海波

を臨し宮島をうつしぬるに艫の方に立て其景を
写し川といへり此趣ハ紅毛油画法をもてうつしけれバ写じし拙此風景廣島
川に入て猫屋橋に着、廣島ハ藝州侯の城下市街縦横あり
則左方に見て右の方に入魚市場あり繁昌なる躰也夫より町を出
離て海邊に出小島数々見えて佳景なり一里半草津といふ所に
至る猪口といふ漁舟にて宮島に渡海上三里宮島亘七里田
畑なし樹を伐ず海岸に人家を作千余軒あり市中鹿を放又
猿多し宮居ハ平相國清盛の創立也神さびたる事いふばかりなし
此日九月十七日大潮満て廻廊の燈火水面に映ず

藝州嚴島宮之圖

彌山岳と云ふ
山上に堂宮多し
未蛇をとるれと
登る事を禁す

宮島を出船し小方(ヲカタ)
といふ所に着(ツク)往還(ワウクワン)し
是(コレ)より二里関戸(セキド)乃
驛(エキ) 右の方一里入(イル)防
州岩國より
岩國錦帯橋(キンタイキヤウ)乃圖
此山を城山といふ
山ノ寺なり

橋百二十間を
中の橋三ツハ
槌ろし

九月廿日防州岩國ふいたる此處山中ふして海と三里を隔り
此れ方ハ石見乃國より岩國城下錦川流て橋五ツ架たり
然ちも百廿間ある錦帯橋と名付人家橋より西南に傾り
皆瓦屋ふして富商者町二十餘町ふして二万余家あり
旅館主人の話ふよるに此國總て疱瘡を嫌ふ稀ふ疱瘡
を煩ふ者あれハ市中に居ることなく私家小津村といふ所へ
引越させるに此者三月の間に海上蜃氣起ることなく
先蜃氣起んとする時ハ春月天氣朗ふして海上に霧を
生じ遙くかすみて一里又半里を隔城郭屋楼のごとく文

なりきたる事とも知ず扨去んとするに織物の具に
機とるものの中に穴ある所より水をとらんとし彼犬神有
るゝ人より者は鉄に依ば忽犬神の者ときつて問ふに
随て答ることにかゝる博学多識の人も其理を
奇妙なる理にせしもの落去るとかや
岩國より七里鍾ケ原といふ所深山にして水晶石英有
すぐれ又此ちかきに地倉といふ所に流河にしてその水底皆
板の如し岩にして其地の倉をなせし故に名
廿三日朝五時より錦帯橋を渡川に沿ひて行事十余

町船にて川を渡十五六町入て阿品村より夫をかへて行こと
八九町山の方に入犬戻といふ山あり骨をりて渓水あり
岩石にそうて飛事に峨々たり此ところ秋なれば
岩上草木紅葉して手山水画のごとし行ばかり一里余
彌山嶽とて山高く甚の嶮岨にして石を踏てのぼる
事二十一町余絶頂に堂あり山神を祭るよし
此山をおりて日暮旅館に入る犬戻右の方山を越
れば洞あり鐘乳石あり

犬戻(イヌモドリ)
岩上松を生ず

犬戻

從是より岩の内洞あり。此路皆岩石をふみて十間廿間乃大石多し

犬戻
此所ハ岩聳へ有り
谷乃深きを恐ワる

岩の皴法

九月廿七日岩國を發して山中に入程なく海邊に出大賀岬といふ
なり向に萩島八代島極て近し其外小島數多見ゆる此ころ
蜃樓見る事ありと漁父に尋ねけるに此日天氣よくあたゝかく
長閑にして春三月比のごとし島々ハ空に浮ひたる様に見ゆる
うち程なく八代島霞に帶てみえけるまゝハ霞中に小山あり
松生しの形ちあらはれたる漁父の曰是則蜃氣樓なりとや
みえてやみぬ秋起る事稀也毎蜃等ハ島々をあらはせし
ありしハ樓臺竹林の類あらはれ時としてハ其島の方へうつりて
あらはれもしけるもの也自夫申ならはして大畠にいたる

此路海邊にして島多し又此前島より一里大島より
十里小島島小黒島小新五郎島是を小峠といふ及島の数二百余もよし
渚邊岩石多し風景佳し七里が浜也大畠の瀬戸山上より
みる両山高く其山間僅三四町ばかりなる海中岩石あつて
出潮の流急にして夫より山をこえて大畠村にいたる此邊旅客
の通り絶て寂寞たりしばらくして柳井津村に宿す市
街風景岩国の領地なり
廿八日柳井津をいでゝ行程一里半多武瀬村をとほり鵜
市といふ所人家多く紺屋多し布を染て此より國木

山を越一ッ峠防州長州の境なり室積と云所山上より見おろし佳景也山をくたりて人家千餘軒もありしとなるべしの邊鄙にして食店なしこゝをすきて松原二里斗島田といへる一村ある旅舘なし農夫の舎に宿す九月廿九日朝未出立して河をこして濱邊松原をゆく事半里余皆沙地なり又海岸に大石ありて或斜にならへあるを飛越て通路にして斗戸呂と云所あり塩濱あり人家ある毛利侯徳山の領地にて戸石と云に出此所よりはなれ徳山にいたる是迄四里福川より此まて二里半

大畠の瀬戸
潮の満るに至ハ急流にして船のはしる事矢のごとし
豊後山
室積

富海(トノミ)に宿ありて富海(トノミ)村を發(ハツ)して行事二里半宮市此所人家
つゞき佐波川(サハガハ)を渡(ワタ)り　右の方山間(ヤマアヒ)より入萩路(ハギミチ)也　毛利侯三十万石乃城下なり
岩淵(イハフチ)峠佐野峠あり　佐野焼とて火鉢壺の類を出す　行事七里山中(ヤマナカ)といふ
所より一宿あり山中を出て發(ハツ)して行事二里半二股瀬川
といふより吉見村新道峠あり船木といふ人家つゞく富商(フシヤウ)多く
此邊總(スベ)て家ごとに石炭(イシスミ)を焚(タク)途中(トチウ)までも臭(クサ)し又煙(ケムリ)
多し船木より出(イヅ)る山腰(サンヨウ)を堀(ホリ)出し石として炭なり
船木より行事七里長府(フ)といふ所ありかゞみ川蓮臺寺坂
吉田川あり岩國より此邊まで櫨(ハゼ)の樹(キ)を植(ウエ)て紅葉如花(ハナ)